

開高健「裸の王様」

片野修

開高健といえば、釣り紀行文の『オーパ！』があり、愛読したおぼえがある。開高健ノンフィクション賞もよく知られており、先日読んだ窪田新之助の『対馬の海に沈む』は最新の受賞作だが、傑作だと思う。そんな中で、私が感銘を受けた小説のひとつに、開高健の『裸の王様』がある。27歳のときの作品で、第38回の芥川賞を受賞した。このときの候補作には、大江健三郎の作品が含まれており、大江は翌年に受賞するのだが、いずれにしてもレベルの高い時代だった。

『裸の王様』は、児童に絵を教えている私のところに、小学校の教師で画家でもある友人の山口から、大田太郎という子供の面倒を見てほしいと頼まれるところから始まる。太郎は大手の絵具会社の社長の息子で、その母親は亡くなり、後妻のもとで育てられている。山口は利己的な男で、自分の都合のよいときだけ責任を他人におしつける癖があった。一方、太郎には友人はなく、絵を描こうとする気力も感じられなかった。生ける屍であり、私にも心を開こうとしなかった。父親の社長は絵が描けなくても進学できればよいと考えており、後妻は太郎が道をはずさずに成長すればよいと考えていた。

ある日、太郎は他の子供が描いたエビガニに興味を示し、「スルメで釣ればいいのに」とつぶやいた。私はこの話題をきっかけに太郎との距離を縮め、川遊びに連れ出した。そこで太郎はコイを見つけ、泥だらけになって捕まえようとするが、逃げられてしまう。このあたりで、著者はハヤ、ハゼ、川エビなどを登場させるが、釣り好きで川の生物に詳しい著者の片鱗が見て取れる。

川遊びをきっかけに太郎は私に心を開くようになり、その絵も子供らしさを取り戻していく。やがて、私はデンマークと児童画を交換する計画を思いついた。この計画は大田社長の知るところとなり、社長はアンデルセンの童話をテーマにした全国規模の公募を実施する。

集まった絵は、山口や他の審査委員に査定され、私からみるとありきたりな小綺麗なもののばかりが受賞した。私はそこに、太郎が描いた相撲取りが闊歩する、裸の王様の絵をまぎれこませた。生命力にあふれる独創的な絵だ。ところが、山口をはじめとして審査委員たちは、太郎の絵を酷評する。下手だ、ふざけている、国際的ではないなどと。そこへ太郎の絵だと知らない大田社長があらわれて、「たっぷりぬりこんでいますな、なかなか愉快じゃないですか」と言うと、山口は「下手は下手なりに自分のイメージに誠実だ」と言い換えて方向転換をはかる。そこで、私がこの絵は大田社長の息子が描いたものだと宣言すると、審査委員たちは狼狽し、山口は色を失ってみすばらしい姿を露呈した。私は腹をかかえて哄笑した。

著者の人物評は手厳しい。大田社長はともかく絵の具が売ればよいと考える俗物だった。小説のタイトルである裸の王様は、アンデルセンの代表作であるとともに、大田社長をあらわしており、さらにその絵を太郎が描く構造になっている。その後妻は太郎を監視し、

枠にはめることしか考えていなかった。そして、この小説のテーマである「太鼓持ち」は山口に向けられる。それをあらわす記述を以下に列挙してみよう。

山口は担任学級の PTA で大田夫人と知りあいになった。何度か会っているうちに彼は彼女をつうじて大田氏にわたりをつけ、・・・画を買いあげてもらうところまで懇意になった。むかしから彼はそんなことにかけては機敏な男であった。

庇護にこたえる気持からか、山口は大田氏がパステル類やフィンガー・ペイントなどの新製品を発売すると、いちはやくとりあげて生徒に教室で使わせ、その実験報告を教育雑誌や保育新聞などに発表した。

絵の背後にある子供の個性を、そうした偶然の効果をねらった手法の、画だけの個性にすりかえてしまう危険をふくんでいるにもかかわらず、彼の仕事は若い教師仲間であたいへん評判がよかった。

めいわくそんなことをいいながらも彼には児童画コンクールの審査員に抜擢されたことをよろこんでいるらしい様子がかくせないようであった。

彼はあきらかに自分の声と大田氏との距離を計算しているのだ。彼はこのチャンスを待ちかまえていたのだ。他の連中が自分の批評眼を弁護することに腐心しているあいだに彼はすっかりスタンド・プレイの準備をととのえ、箱庭細工のようにこぢんまりと整理のゆきとどいた論理をつくっていたのだ。

最後に山口は、「さきほどまではげしいまなざしを失って肩をおとし、みすぼらしげに髪をかきあげた。壇上から審査員を侮蔑し、画家をののしった自信と銜気はもうどこにもなかった。彼は細い首で大きな頭を支えた、みじめなひとりの青年にすぎなかった。すでに彼は画家でもなく教師ですらなかった。彼は苦痛に光った眼でぼくをみると、なにかいおうとして口をひらいたが、言葉にはならなかった。」

この小説のテーマは芸術分野だけでなく、すべての人間社会にあてはまる。権力者におもねると、さまざまな利益がえられるが、それはしばしば本来、中立公正であるべき評価をねじまげることになる。太鼓持ちにもコストはあって、王様が失脚すると逆風にさらされ、厳しい命令や太鼓持ちどうしの競い合いの中で傷つくこともあるだろう。そして最大のリスクは太鼓持ちだと思われることである。その滑稽さに気づくためには、若き開高健のようなまなざしが必要であり、それによってこそ「裸の王様」「太鼓持ち」と呼ばれる危険を回避できるのではないか。